



ショートコメント

★★★★

Data 2022-20

# オペレーション・ミンスミート —ナチを欺いた死体—

2022年/イギリス映画  
配給: ギャガ/128分

2022 (令和4) 年2月19日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

監督: ジョン・マッデン  
出演: コリン・ファース/  
マシュー・マクファデー  
イン/ケリー・マクド  
ナルド/ペネロー  
プ・ウィルトン/ジェ  
イソン・アイザックス  
/ジョニー・フリン

## みどころ

『史上最大の作戦』(1962年)における“Xデー”はいつ?連合国軍の上陸地点はどこ?それは誰でも知っているが、それに先立つイタリア上陸作戦はいつ?どこへ?

「オペレーション・ミンスミート(ミンスミート作戦)」は、シチリアの防備を固めたナチス・ドイツの兵力をギリシャに割かせるため“ナチを欺いた死体”を活用するもの。しかし、そんな奇手奇策が通用するの?チラシやパンフレットには、「世界の命運を握る鍵は地中海に放たれた」「世にも荒唐無稽な嘘が世界を救う」と書かれているが・・・。

『エニグマ』(14年)はメチャ面白かったが、本作は複雑かつ難解。その上、要らざるラブストーリー(?)もたつぷりと。これでは、本作の理解は難しいから、その面白さもイマイチ・・・?

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆第二次世界大戦における“戦争秘話”はたくさんあるが、『オペレーション・ミンスミート』つまり、“ミンスミート作戦”もその1つ。これは、ナチス・ドイツを欺くために連合国側が実行した、驚くべき情報作戦だ。1944年のノルマンディー上陸作戦は『史上最大の作戦』(62年)等で有名になったが、連合国軍のイタリア上陸作戦についてはあまり知られていない。

ミンスミート作戦は、“連合国側のイタリア上陸作戦はナチス・ドイツが防備を固めているシチリアではなく、ギリシャである”という偽りの情報を流し、それを信じこませることによって、シチリア上陸を容易にしようというものだ。その作戦を立案したのは、イギリスのMI5配下にある二十委員会や13号室等の情報機関で、その責任者はユーエン・モンタギュー少佐(コリン・ファース)とチャールズ・チャムリー大尉(マシュー・マクファディン)の二人だ。なるほど、こりゃ面白そう。

◆史実としての「戦争モノ」は『バルジ大作戦』（65年）等面白いものがたくさんあるし、「スパイもの」としては『007』シリーズや『裏切りのサーカス』（11年）（『シネマ28』114頁）等が面白い。しかし、「史実としての情報戦」を絡めた「戦争モノ」としては『エニグマ』（01年）（『シネマ3』240頁）が絶品だった。ジェームズ・ボンドのようなスパイ個人の活躍も面白いが、諜報機関が組織を挙げて取り組む作戦では、何よりもチームワークが大切。『エニグマ』はそんな当たり前のことを徹底的に教えてくれたが、さて本作では？

諜報機関が秘密を大切にするのは当然だが、それを突き詰めると、仲間同士でもお互いを疑わざるを得ないことになってしまう。そんな事態は、私が毎日見ている中国の時代劇ドラマでは常だが、ひょっとしてミンスミート作戦の共同立案者であるユーエン少佐とチャールズ大尉の間にも何らかの秘密が・・・？

◆『史上最大の作戦』ならタイトルを見れば大体のことはわかるが、「オペレーション・ミンスミート」では何のこともサッパリ分からない。そこで邦題では「ナチを欺いた死体」というサブタイトルをつけたから、おぼろげながらミンスミート作戦の内容が分かってくる。

本作のチラシには「第二次世界大戦、ナチス優勢の戦局を覆すため、英国諜報部【MI5】が実行した前代未聞の奇策とは」とある。またパンフレットにも、「それは銃弾が飛び交う戦場の裏側にある、もうひとつの戦争。世にも荒唐無稽な嘘が世界を救う」と書いてある。勝負の世界では、正攻法だけでなく、様々な奇手奇策がある。「関ヶ原の戦い」では正攻法同士のぶつかり合い（？）だったが、『三国志』の「赤壁の戦い」はまさに諸葛孔明一世一代の奇手奇策だ。しかして、ミンスミート作戦は、なぜ前述のように言われるの？

◆別名「トロイの木馬作戦」とも言われたミンスミート作戦は、連合国側のイタリアへの上陸地点についての嘘の情報を持たせた死体を海に流すもの。その死体を回収し、持っていた情報を分析した敵は、連合国側の上陸地点がギリシャだと判断し、強固な防御陣を築いていたシチリアの兵をギリシャに移動させるから、シチリア上陸成功の可能性が高まるというものだ。なるほど、なるほど・・・。

現在、緊迫するウクライナ情勢でも、ロシア側とウクライナ側双方が様々な情報を流しているが、その中には意図的な偽情報もあるらしい。勝負事が大好きな私は、実力本位の囲碁や将棋でも騙し戦が含まれている上、運の要素が強い麻雀は一種の騙し合い合戦だと思っている。すると、諜報機関に務めるユーエン・モンタギューやチャールズ・チャムリーたちプロの諜報員たちはミンスミート作戦で如何なる嘘を？

◆日中戦争、太平洋戦争を通して、日本には「天皇陛下暗殺計画」はなかったが、ドイツ

には「ヒトラー暗殺計画」があった。それが、『ワルキューレ』（08年）（『シネマ22』115頁）で描かれた1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件だが、ヒトラーが信頼するナチス・ドイツ諜報部門の責任者が、もし“反ヒトラー陣営”の黒幕だったら・・・？

本作の新聞紙評での評価は高い。しかし、私には本作は複雑かつ難解すぎるのが難点だ。いくら何でもこんな作戦がホントに“作戦”と言えるの？あまりに偶然に頼りすぎているのでは？また、作戦実行後はどうすれば把握できるの？その点、本作を見ていても私には全然納得できなかった。また、「ユーエン・モンタギュー少佐のラブストーリーが良い」という評論も多いが、私にはそれはナンセンス。こんな難しいミンスミート作戦を映画にするのなら、それだけを徹底的に観客にわからせるべきだ。

本作でユーエン・モンタギュー少佐役を演じたコリン・ファースは、『キングスマン』でもMI5のスパイを演じているが、本作の彼の演技は私にはイマイチ。『英国王のスピーチ』（10年）（『シネマ26』10頁）のジョージ6世役はよく似合っていたが、本作では中途半端なイメージしか持てなかったが・・・。

2022（令和4）年2月22日記